

大学教育だより



RDHE 2018.3 No.15

Center for Research and Development of Higher Education

大阪市立大学
大学教育研究センター
〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138
(全学共通教育棟5階)
<http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/>

これまでの記事は <http://www.rdhe.osaka-cu.ac.jp/publications/index.html> から読めます

大学教育だより No.15

Voice～学生の声

Campus Inquiry

OCU Education News

Center Now & Human

文学部・研究科と生活科学部・研究科の学生交流と意見交換会

ウチの学部・研究科・センターではこんな教育を行っています!

都市健康・スポーツ研究センター / 英語教育開発センター / 商学部・経営学研究科

市大教育ニュース!

副専攻制度 / 学修支援推進室(OCUラーニングセンター)の紹介

大学教育研究センターの活動・研究・スタッフ紹介

アン ロゾ (Un roseau) No.19 : 縦書き部分

安竹 貴彦 先生(法学研究科)

大久保 敦 先生(大学教育研究センター)

Voice ～学生の声

文学部・研究科と生活科学部・研究科の学生交流と意見交換会

—— 心理学を専門とする学生たちの学び合い ——

文学部・文学研究科と生活科学部・生活科学研究科にはどちらも心理学を学ぶカリキュラムがあり、前者が実験心理学、後者が臨床心理学と領域が異なっています。研究の内容や方法のどこが共通して、どこが違うのか、お互いに学び合う機会が設けられました。2017年12月6日、文学部の心理学の学生が生活科学研究科の三船直子教授の大学院・学部の合同ゼミを見学に行き、同13日には、生活科学部の

学生が文学部の山祐嗣教授の3回生向けの演習に見学に行き、さらに両者の懇談会が行われました。懇談会の参加者は、文学部人間行動学科心理学コースの学部生など3名と、生活科学研究科・学部で心理学を学ぶ院生・学部生10名。また、山先生と三船先生および大学教育研究センターの飯吉弘子先生にも加わっていただきました。司会は文学研究科の丹羽と生活科学研究科の松木が担当しました。



生活科学部の臨床心理学コースのゼミ



文学部の心理学コースのゼミ

お互いのゼミを聴講して

【文：A(3回生)】ゼミに参加させていただいて、こちらが無知だったっていうのもあって、これってどういうことなんですか、と何回か質問させていただいたんですけど、やっぱり

り文学部の心理とは視点が違うというか、個人に注目して、丁寧に見ていっているのがすごく印象に残っています。

【文：B(4回生)】社会心理学や認知心理学では、ふだん一人一人にアプローチすることはあんまりなくて、それがすごく

文学部・研究科と生活科学部・研究科の学生交流と意見交換会

とても新鮮だったなというのと、その観察ってということがどのように行われているのかがあまりよくわかってなかったことが、この間のゼミに参加させていただいてよくわかったので、すごく勉強になりました。

【生：A(3回生)】私たちも、自分が研究テーマがまだ固まっていないので、同じ3回生の時点でここまで考えてらっしゃって、それまでいろいろ準備を重ねてこれらでってということがすごいなと思いました。私たちも、その同じような行程を踏んでいってしっかり準備を進めていかないといけないやなと感じさせていただいたので、本当にいい機会でした。

文学部の心理学コースのゼミ

【文：B(4回生)】ゼミは、基本的にほとんどが3回生のころからで、論文講読からまず始まって、自分の興味・関心のある論文をもう手当たり次第に読んでいくというのが基本スタイルになります。3回生の右も左も何もわからない状態からいきなり論文を「ハイ」と渡されて、最初は日本語論文なんですけれども、だんだんとハードルを上げて英語論文にもチャレンジしていくということで、その中から自分が興味・関心のあるテーマにどんどん絞っていきます。心理学コースでは3回生の前期に上級実験のレポートというものがあまして、そこで自分で実際に研究計画を立てて調査なり実験なりを行なって心理学の論文形式のレポートを書くということが前期の集大成になっています。

【文：A(3回生)】夏休みに前期の研究の集大成として1万2,000字のレポートを出すんですけども、一応その形式としても日本心理学会の手引きにのっとって書くということを最初から言われています。わりと研究というものを教えてくれるコースなのかなというふうに思っています。



【文：B(4回生)】これが心理学の研究のやり方かというお作法に、初めて自分たちで触れる。実際に手探りの状態で、もちろん先生や院生さんなどのサポートはあるんですけども、とにかく必死で計画を立てるといのが、もうものすごくしんどかったけど、でも、一番達成感があったかなと思います。

【文：C(OG:最近の卒業生)】何か読んできて、それを発表するという中で、その論文に対して自分がどんなふうに批判的な視線を向けたりとか、どこに同意するかっていうことも大事な視点になるかなと思いますし、実験を自分たちでやっていくにあたって、その計画を立てるのがすごく大変だったように思います。そこで、

ふだん受けている授業がすごく生きてくるというか、そういえばあのとき先生はこうやって仮説立てるんだよって言ってたよな気がするという感じで立てていく。

【文：B(4回生)】講義型と実践型が並行して行われているのがすごい力になるというか、それが多分、文学部心理学コースの一番の強みかなと思います。

【文：C(OG)】楽しい。しんどいんですけど、やっぱり考えてやるのは楽しいなって思います。

生活科学部の臨床心理学コースのゼミ (三船ゼミのグループセラピー)

【生：B(M1回生)】3回生でゼミに入ってからなんですけど、興味・関心のある分野からスタートして、本を読んだりとか論文を読んでいくっていうのもあるんですけど、人と関わる実習先だったり、学内でやってる実習でも、やっぱり体験として学び感じていく部分がすごい大きいなということがあります。そこを軸に文献を並行してやっていくっていうイメージだなと思います。



【生：C(M1回生)】本とかだけでは実感が湧かないことも、発表支援の共同研究の実践の中で見ていくことですごく腑に落ちるといふか、実感を伴って自分の中にたまっていく感じがあるので、やっぱり実践先でのこの体験というのが一番大きいですね。そこからまた興味とかもいろいろ増えていって、そのテーマが卒業論文であったりとか修士論文とかの研究につながっていくと思います。

【松木先生】自己紹介のときにグループセラピーの話をしたのが印象的だったんですけど、やはりそういうふうな人に関わる経験ををしたということが進学に至るようなきっかけになってるってということなんです。

【生：C(M1回生)】そうですね。これを続けて、ゆくゆくは仕事としてそういうふうに関わっていきたいなと思ったのが、一番の進学の決め手やったかなと思います。お母さんとか子どもとかがみるみるうちに変わっていくのが、目で見てすぐわかるぐらいの感じで、ものすごく実感を伴って変わっていくというのが印象的でした。それはお母さんとか子どもたちが持つてる力やとは思うんですけど、やっぱりそういうのに関わっていけたらなって思いました。

【三船先生】グループセラピー、実習とは呼び名で言うんですけど、ゼミの研究なんです。地域支援と研究というのを兼ねていて、

区のほうでやっている1歳半健診の後のフォローのグループに3回生が徐々に入っていきます。初めは見学という形から、子どもさんと実際関わってって、そこからのフォローで、言葉が全くなくてASDの傾向が強い親子の愛着の再形成を研究テーマとしてグループでやっていて、4回生になると、授業がなくなっていって実際にスタッフとして入ってもらいます。親子が数組来て、その人たちに心理療法的支援を行うという形をとっています。朝2時間なんですけど、それが終わったら、夜遅くなるまで、振り返りといういろんなまとめと、それから次どうするかというのを徹底的に行うシステムです。きっと(文学部の学生さんが)すごく大変な論文を読んでおられるのとはほぼ匹敵するぐらい、この人たちは、うまくいかなかったら落ち込むし、涙するし、大変な苦労をしています。

理論と実践

【文：C(06)】実験でも、理論どおりいかないこととかは全然あるんで、(それについて)いろいろ説明をするんですけど、そういうことが(グループセラピーの)現場で起こるとすごい不安じゃないのかなって思うんですけど、どうですか。

【生：D(M2回生)】確かに、実際に臨床の現場にいと、理論どおりにいくということはまずないんじゃないかなという感じがして、むしろ、目の前にいるその人だったり、その子どもだったりとか、そこから何をみつけるかという見方をしてるかなという感じがして、それがたまたま後から本を読んだりとか、ちょっと調べてみたりしたら、ああ、あの人の言ってるこの理論に当てはまるかもしれない、そしたら、同じ行動でも、自分はこう考えてたけどまたちょっと違った見方ができるかもしれない、そんな感じの広がり方をするかなと個人的には思っています。



【生：E(M2回生)】文学部の心理学を卒業して、現在、生科の大学院の心理学に在籍)何か乖離というか、やっぱり理論では説明できないことが現場では起こっていて、理論を勉強しても現場では使えないことが多いんじゃないかなっていうのもあって、私自身も今まで(文学部で)4年間勉強してたことってここで何の役に立つんやろうって思うこともあったんですけど(笑)。何か型どおりにいかない、理論だったらこういくはずなのになんか思っても全然違うふうに行くことがあって、でもそのときに、理論を自分は勉強してたからこそ、何で違ったんやろうって考えられるのかなと思います。お母さんのこういう行動が変化してるから、(子どもも)そのままいくはずだったところに変化が生まれたんかなとか、自分の中でいろいろその人を見るときに、何か資源じゃないけど、考えるきっかけになって、そういう意味で、私が今まで文学部でやってたことってすごく生かされてるなって感じることもあります。乖離もあるかもしれないけど、あっても無駄じゃないというか、どっちにもよさがあるのかなとは感じます。

【文：B(4回生)】(グループセラピーで)どこまで関わっていいのかが、深入りしていいのかっていう、そういう葛藤とかもあるんですけど。

【生：D(M2回生)】それはもう常にとというか、2人、人がそこにいるという時点で、もう何かしら相手にも影響は与えられているし、自分にも影響は何か与えるというのは、常に思いながら関わってっています。できるだけこの人の不快にはならないようにという思いもあつつも、でも、自分が思いもよらないところで本人にとっては悪いことになっていたりとか、逆にいいことになってたりすることもあるとは思っています。そういったことも常に葛藤しながら、観察したり、話を聞いたりしていったらという感じですね。



【文：B(4回生)】今のお話聞いてて、人間ってこういう状況になったらこういう感情になるんだという、そういう理論を立てることは何かやっぱり実験系の心理学の役目なのかな、というのは今日のお話で感じたので、そこでそれを知るか知らないかで大分違ってくると思う。少しでも理論があって、それを実践に生かせるような臨床と実験が補完し合えるような、そういう心理学であってほしいな、そういう心理学を目指したいなというのは、すごい思いました。

【生：F(3回生)】発表を見に行かせていただいたときに、個々の実験が実際に臨床の場でどういうふうに生かせるのがちょっと自分にはわかりにくいなと思ってたんですけど、今日の話聞いて、理論の大事さというか、理論があったらより多くの人の支援につながるんじゃないかなと思うし、ミクロの支援だけでなくマクロな支援も大事になって改めて気づけたので、すごくためになりました。

【生：G(3回生)】私は3回生でゼミに入ったばかりでまだふわふわしてるのに、もうこんなにやってはるんやって思ったら、もう言葉出ないぐらい。今日のお話聞いて、ちゃんと目的があることも知れたのがすごくうれしくて、Bさんの卒論とかまた読んでみたいです(笑)。

【文：B(4回生)】ありがとうございます。頑張ります。

[参加教員の感想]

大変充実した懇談会になり、聞いていて楽しかったです。学生さんたちの意識の高さに感心しました。上に掲載したのは話していただいた中のごく一部で、他にも興味深いお話がありましたが、ここに盛り込めなくて残念です。

(文学研究科 丹羽哲也)

実験心理学と臨床心理学のどこが異なり、どこが共通しているのかがよくわかる座談会になりました。これから心理学を学ぶ学生さんにも、どちらかに閉じこもるのではなく、広い視野をもって学んでいただきたいと思います。

(生活科学研究科 松木洋人)

文責：大学教育センター兼任研究員 文学研究科教授 丹羽哲也
生活科学研究科准教授 松木洋人

ウチの学部・研究科・センターではこんな教育を行っています！

都市健康・スポーツ研究センター

健康に資する運動・スポーツへの多角的なアプローチ — これからの「日本の元気」を担う学生へ向けて —

心身の健康への効果だけでなく、スポーツを通じて我々は目標に向けて努力する忍耐強さや向上心、チームや競技のコミュニケーションの中で他人を思いやる心などを養うことができます。豊かな人間性を構築し、さまざまな可能性をもって社会へ飛び出そうという時期にある大学生が、生涯にわたってスポーツに親しむために必要なスポーツ科学の知識やスポーツ実践能力を修得し、健康的な活動的なライフスタイルを核に充実した社会生活を営むことのできるよう、都市健康・スポーツ研究センターでは、全学共通科目の授業として、「健康・スポーツ科学科目」を開講しています。ここでは、学生・市民のスポーツ習慣の獲得や健康増進に携わってきた我々ならではのユニークな取り組みとともに、その内容をご紹介します。

健康・スポーツ科学科目について

健康・スポーツに関する知識と理論を学ぶ「健康・スポーツ科学講義」は、「健康運動科学」、「体力トレーニング科学」、「スポーツ実践科学」の3領域により構成されます。それぞれ、現代社会の健康問題に対する運動処方の効果、体力諸要素に対するトレーニングの理論、また、ライフステージに対応したスポーツ実践についての学修を目的とした授業展開となっています。

「健康・スポーツ科学実習」は、講義の3領域に対応した「実験実習」と「スポーツ実習」で構成されます。実験実習においては講義で得た知識や理論に関する理解を深めることを目的に、各種の身体機能や体力要素について測定機器を用いて評価する方法を学び、さらにグループ実習などで、運動負荷によってもたらされる生体機能の変化を分析・考察する能力を養います。

スポーツ実習は現在13種目で開講しています。これらの種目を教材として実際にスポーツ活動を行うことで、単なる技能の向上のみならず、実践体験の中で得られる他者とのコミュニケーションを介して社会性、



協調性、倫理観を培い、生涯を通じてスポーツを実践するための資質を育成することを目的としています。また、障がいのある学生や種々の事由によりスポーツ種目の実施が困難な学生向けに、個々の体力と目的に応じた運動・スポーツを実践するための方法を学ぶ「健康管理」も開講しており、すべての学生のニーズに対応可能なカリキュラム構成となっています。

サロン スポーツ トップアスリートのまなざし

トップアスリートによるスポーツへの思い、取り組みに関する講演と交流の場を通じて、スポーツを「する」だけでなく「みる」ことへの学生の関心を深め、パフォーマンスや心理面の向上など自らの実践の場に生かすことを目的として講演会を開催しています。平成27年度はアジアマスターズ陸上競技大会優勝経験の有する赤堀弘晃さ



を講師に迎え、体幹部の強化により「ぶれないフォーム」だけでなく「ぶれない精神」をつくることの重要性について学びました。

スポーツ実践率向上を目的としたアイデア創発型ワークショップ

平成28年度にはスポーツ庁補助事業として、「コミュニケーション力の向上の手段としての運動・スポーツ」を日常生活に取り入れるためのアイデアを創出するワークショップを開催し、65名の学生が参加しました。運動嫌いな学生が、運動・スポーツを実施しない原因を明らかにし、どうすれば運動・スポーツができるかについて、アイデアソン手法を用いてその方策を探りました。ほとんどの学生が「アイデアソン」を初めて体験する中、アイデア出しを通じた学生間の交流を楽しみ、自身のスポーツとの関わり方をあらためて見つめる時間を過ごしました。



さあ、授業が終わった！「市大ストレッチ」

座位時間の健康への弊害が明らかにされてきていると同時に、講義ノートをとる学生の姿勢の悪さが目立ちます。1コマ90分の授業を日に何度もこなす学生の身体活動時間の確保や、不良姿勢からくる眼精疲労や肩こりに良い対策はないかと、椅子に座ったままでできるオリジナルの「市大ストレッチ」を考案しました。総勢200名の学生・教職員による出演協力のもとストレッチ動画が作成され、大学キャンパス内のさまざまな風景も盛り込まれました。「市大ストレッチ」は授業後の学生のリフレッシュに活用され、メディアにも取り上げられました。



これからの時代の健康・スポーツ教育

2019年のラグビーワールドカップ、2020年の東京オリンピック・パラリンピック、2021年のワールドマスターズゲームズと、今後日本ではスポーツの世界大会の開催が目白押しです。さらに、大阪が「健康・長寿」をテーマに2025年の万博開催に名乗りを上げたことにより、健康・スポーツへの機運はますます高まりを見せています。そのような時代に生きる学生は、自身がスポーツ活動へ参加するだけでなく、これからの社会の担い手として健康・スポーツに関連するさまざまな分野での活躍の可能性を秘めており、そこで求められる資質や能力の育成は我々の重要な責務であると考えています。この理念を共有し、目的がかなえられるよう、我々は日々の教育に取り組んでいます。

都市健康・スポーツ研究センター 准教授
横山 久代

学部研究科 教育・FD 紹介

ウチの学部・研究科・センターではこんな教育を行っています!

英語教育開発センター

英語教育開発センターの学修支援

CEの授業と英語の自学自習

英語教育開発センターでは、平成29年度から、学生みなさんに英語を自学自習する習慣を身につけてもらうことを目的に、英語教員による学修支援を始めました。

英語教育開発センターは全学共通教育の英語科目を統括しています。全学共通教育の英語は、1年生と2年生を対象として、学生みなさんに基礎的な英語力を修得してもらうことを目的としています。基礎的な英語力とは、3年次以降、それぞれの専門分野に進むと、英語のさまざまな文献や資料などを目にするようになりますが、そうした専門的な英語を理解し、使いこなすためのベースとなる英語力を考えています。

こうした英語力を養成するために、まず英語教育開発センターは必修の英語科目としてCollege English(CE)を、選択科目としてAdvanced College English(ACE)を提供していますが、CEは原則的には1年次は週に2コマ、2年次には週に1コマしか提供されていません。これだけでは、基礎的な英語の力を身につけるのに絶対的に学習時間が足りません。きちんとした英語力を修得するためには、自学自習が不可欠です。こうした自学自習の習慣を身につけるのを手助けするために、新しい学修支援が始められました。

自学自習とは、たとえば授業で与えられた課題をこなす、といった受け身の学習ではなく、自ら目標を設定し、それを達成するのに必要な課題を自分で考え、自分で計画を立て、それに取り組んでいく、といったような自発的な学習を意味します。しかしながら、そうした目標設定から学習計画の立案、その遂行までを完全に一人で行うのは、なかなか困難です。ならば、意欲のある学生を支援して、少しでも自学自習の習慣を身につけてもらおう。そうした思いから、二人の英語教員が学習支援を担当しています。

ラーニングセンターでの英語自学自習支援

では、どのように学修支援をしているのか、具体的に説明していきます。

英語の学習支援は自習室(全学共通教育棟1階)内にあるOCUラーニングセンター(学習支援推進室)で、毎週火曜日の午後2時半から5時までと、毎週木曜日の午前10時から正午までの週2回、実施されています。火曜日はエリザベス・リー先生が担当です。予約した時間にリー先生のところに行くと、なにをしたいのか、どんなスキルを高めたいのか、先生と相談しながら目標を設定し、さらにその目標に到達するのに必要な学習計画を作ります。計画の中には課題なども含まれているので、計画に従って、それらの課題に取り組んでいきます。定期的に先生のところに行き、計画の進捗状況を確認し、必要があるなら、先生と相談して計画を変



更したり、目標を修正したりして、自分のペースで無理なく学習を続けていきます。このようにして自学自習の習慣を養成していきます。

リー先生の学修支援は英語自主学習全般に関わる相談を受け付けていますが、毎週木曜日の午前10時から正午まで行われているデイヴィッド・チェン先生の学習支援はライティングに特化しています。本学で独自に実施した調査で、本学の在校生は、中学や高校で英語を「書く」という体験をほとんどしていないことが明らかになりました。読んだり聞いたりして英語をインプットしていくことも大切ですが、そのインプットをもとに、書いたり話したりして、アウトプットしていくことも重要です。CEやACEでもライティングはしますが、より細やかな指導が受けられる場を提供するために、ライティングに特化した学修支援を実施しています。

チェン先生の学習支援では、毎月、英作文のトピックが発表されます。そのトピックに沿った英文を作って持って行き、チェン先生に指導してもらいます。その指導をもとに書き直し、それをまた指導してもらいます。それを繰り返すことによってライティングの能力をブラッシュアップしていきます。

なお、学修支援は自学自習の習慣を養成するためのものなので、授業の課題やレポート、論文の添削などはしません。また、相談の進め方からわかるように、1回かぎりの相談ではなく、継続的に来てもらうことを想定しています。

Learn to improve your writing skills. >>> 新しく始まるライティングの学習支援です。毎月課題が公開されます。

11月9日(木) 英語学修支援がパワーアップします!

毎週火曜日 午後2:30 ~ 午後5:30 (リー先生)
毎週木曜日 午前10:00 ~ 正午 (チェン先生)

OCUラーニングセンター
TEL: 06-6503-2906
email: oca@ocu.ac.jp

English Café

英語教育開発センターが提供している、自学自習の習慣を養成するための機会は学習支援だけではなくありません。ほかにも、英語に触れる機会を増やすためにEnglish CaféをGlobal Village(全学共通教育棟1階)で運営し、週3回(月曜日、水曜日、木曜日) English Café Talkを開催しています。English Café Talkでは、ネイティブ教員と自由に会話やディスカッションを楽しむことができます。またCafé内のPCにはeラーニングソフトのALC NetAcademy2や、シャドーイングやスラッシュリーディングの練習ができるVSS Playerもインストールされており、これらを使った自習学習も可能です。

冒頭でも言ったとおり、授業だけでは十分な英語力を養成できません。学生みなさんには、自学自習の習慣を身につけて、立派な英語力を養ってもらいたいと思います。

両先生からのメッセージです。

[リー先生] Are you interested in improving your English skills through extra self-study? I can guide you towards your individual study goals. We can achieve success together!

[チェン先生] While writing remains perhaps the most difficult skill, let's work together to make it less challenging and, at the same time, more rewarding.

英語教育開発センター 准教授 山本 修

市大教育ニュース!

大阪市立大学 副専攻制度

大阪市立大学は、2015(平成27)年度より、主専攻(それぞれの学部・学科で修める単位)に加えて、さらに広く、深く、自発的な学修をすすめたいと考える学部生を対象に、ふたつの副専攻を設立しています。学習余力と意欲と能力があり、主専攻と副専攻を両立でき、各副専攻が求める要件を満たす、の3つを備えた人であれば、学部を問わず履修することができます。

詳しくは、入学手続き書類に同封されている「副専攻ガイド」をご覧ください。

GC(Global Communication)副専攻

目的 : 不確実な社会で生き抜くことのできる語学運用能力とグローバルマインドを涵養する
 キー演習 : GC総合演習1・2・3 1年次後期～2年次開講
 キー海外研修 : GC_Int(GC副専攻専用カナダ・ビクトリア大学語学研修)
 2年次前期、9月実施予定
 成績優秀者・語学運用能力上位者には研修費支援制度あり

2018(平成30)年度の正式登録者募集は7月です。2018(平成30)年度入学の1回生のみGC副専攻に登録できます。希望者多数の場合は、各種語学力テストのスコアに基づいて選抜が行われます。登録希望者向けガイダンス日程については、全学ポータルサイトおよびチラシにてご案内します。関心のある方は、入学後から語学(特に英語)のスキルをバランスよく伸ばし、副専攻の登録・履修に備えましょう。

CR(Community Regeneration)副専攻

目的 : 大阪を拠点として、変化し続ける地域・社会の問題を解決するとともに、その発展に貢献できる人材を養成する
 キー演習1 : 地域実践演習(GATSUN) 1・2年次向け
 キー演習2 : アゴラセミナーIa / Ib / II 2年次以降向け

2018(平成30)年度の地域実践演習履修希望者向けの説明会が開催される予定です。CR副専攻への登録には地域実践演習の受講が必須要件ですので、希望者は説明会に必ず参加してください。説明会の日程については、全学ポータルサイトに事前にご案内します。関心のある方は、全学共通科目の中から大阪・地域にかかわる科目を積極的に学び、副専攻の登録・履修に備えましょう。

OCUラーニングセンター/学修支援推進室では

学生の皆さんの自主的・能動的な学修を専門のスタッフがサポートをしています。



学修相談

レポートってどう書くの?
 グループワークってどうするの?
 自主的に学べて言われるけど、どうすればいいの?
 (担当: 金丸先生、佐々木先生、小槻先生)
 相談受付時間: 平日10時～17時15分

誰に質問
 したらいいの?



数学相談

1年生の必修科目を
 中心に**なんでも!**
 基礎力をしっかり身につけたい...
 今日の授業でわからないところが
 あったな...
 (担当: 数学研究所博士研究員)

試験前には行列が
 できるほど人気!?



英語相談

自分で書いた英語のライティングの
 課題を基に、個人指導で弱点克服したい...
 (担当: デイビッド・チェン先生)
 自分の実力を知り自分の目的に
 合わせた英語の学習方法を知りたい...
 (担当: エリザベス・リー先生)

自分のペースで
 実力を上げたい...
 でもどうやって?



OCUラーニングセンターに来れば、「学びのTips」が多数用意されています!

✓大学での数学の勉強について・大学で学ぶってどういうこと・先生への質問や相談の仕方・レポートの書き方・数学理解度チェックシート...



教育と学修支援のためのセミナー企画

レポートのいろは
 アジアの純心
 2018年度の企画多数

学修支援推進室
 【場所】全学共通教育棟1階 815教室隣
 【開室時間】平日9:00～18:00
 【連絡先】06 6605 2906



8号館1階(自習室)
 OCUラーニングセンター

大学教育研究センターは「こんなこと」に「こんなメンバー」で取り組んでいます！

FD (Faculty Development) 活動

(1) FD 研究会 (年1回)

FD 研究会は、大阪市立大学における教育の向上を図るための学内外の教育改善・FDの取り組みの紹介や、本学の教育のあり方に関する全学的な情報共有や議論を深める場として設定されています。例年、100名前後が参加してきた大きな研究会です。2017(平成29)年度、第15回の全体のテーマは「学生の自律的学修を促進する学修評価・支援システムを考える」でした。



(2) 教育改革シンポジウム (年1~2回)

教育改革シンポジウムは、大学をめぐる多様な課題について、学内外の情勢を鑑みながら全学的に考えを深めることを目的に開かれています。2017(平成29)年度は、第25回全体テーマ:「入試のデザインを考える 高大接続改革の中で教育の内部質保証をどのように担保するのか」講演題目:「入試のデザインを考える 大学入試の諸原則と高大接続改革の深層」(講師:東北大学 倉元 直樹 先生)でした。



(3) FD ワークショップ・大学教育研究セミナー (年数回)

FDワークショップと大学教育研究セミナーは、ワークショップ形式またはラウンドテーブル形式等を取り、主に学内の参加者間で授業デザイン事例など教育実践事例や大学教育に関する研究活動の成果の紹介とそれらについての意見交換を行う場として設定されています。

研究成果の発信と広報

(1) 大阪市立大学大学教育研究センター紀要『大学教育』

主として本学の教育に資する研究成果の発表の場として、学内はもとより全国から投稿を募り、年に1~2回発行する査読付き学術雑誌です。センターのFD活動・研究活動の報告の場でもあります。

(2) 大学教育だより & Un roseau (アン ロゾ) ほか

本学の学生・教員および学外の方々に、総合大学である大阪市立大学における様々な教育の取り組みと、学生の学びの様子や可能性を知っていただくための教育広報誌『大学教育だより』と、本学での学びの道しるべとしての全学共通教育総合教育科目ガイドブック『アン ロゾ』を、2006年度から合冊発行し広く学内外に配布しています。また、『新入生のための学びのスタートガイド』も発行しています。

センターが関わっている研究活動

(1) 学修の評価に関する研究

本学で学ぶ学生・院生の学修成果の状況を把握し、教育のさらなる充実や改善につなげていくために、学士課程・大学院課程の在學生と卒業生・修了生に対するアンケート調査などを実施しています。調査結果は、報告書にまとめたりFD企画で発表したりして学内での共有にも努めています。また、成績評価結果をもとに学生一人ひとりが何を身につけてきているのかを自身のキャリアデザインも踏まえて捕捉できる仕組みであるOCU指標の開発にも協力しています。

(2) 教育実践・カリキュラムの開発と評価に関する研究

初年次教育関連: 総合性と専門性を兼ね備えた「大学での学び」への円滑な移行のため、初年次教育の全学的質保証が求められています。本学の学部学科の多様性を踏まえつつも、すべての1年生に求められる学習目標を達成しうる仕組みづくりに協力しています。

副専攻プログラム関連: 2015(平成27)年度より、大阪市立大学にはふたつの副専攻が発足しました。ひとつは、グローバル社会で生き抜く基礎力をはくむ Global Communication 副専攻、もうひとつは、地域に根差し、地域で活躍できる人をはくむ Community Regeneration 副専攻です。センターは、これまでに行ってきた教育評価研究と実践を足掛かりに、副専攻カリキュラムデザインとシステムデザイン、修了認定にかかわる評価方法等の策定を支えてきました。

学修支援推進関連: 学生の能動的学修促進のための支援を行う学修支援推進室における、自主学修補助教材やTA・SA育成プログラムの開発研究、アクティブラーニング型授業開発支援等に協力しています。

大学院共通教育関連: 大学院の研究科を超えて履修可能な大学院共通科目の制度構築を担うとともに大学院生のキャリアデザイン系の講義・演習科目等の開発と提供を行っています。

(3) 本学の教育改善・FDに関する調査研究

本学では、FD(ファカルティ・ディベロップメント)を、本学の学生が真に学ぶ教育の高い質の維持と一層の向上のための、構成員全体(教員・職員・学生)の自律的で組織的な取組として捉えています。センターでは、全学の教育改善・FDを企画推進するとともに、近年急速に活発化している各学部等の教育改善・FDの取組への協力支援も行っています。また、本学教員の教育・FDの日常的活動状況や意識の調査・分析を定期的に行うとともに、集まった教育実践事例を教員相互で活用し合えるWEBデータベースも開発し学内教員に公開しています。

(4) その他、学内の教育研究・教育改善・開発ニーズに基づく研究

上記以外に、学内ニーズに基づく各種調査・研究活動も行っています。

入学者追跡調査の実施および入試選抜方法や入学後の教育改善に関する研究、全学と学位プログラムごとの3ポリシーの点検・改訂支援、教育評価方針と計画の策定支援、全学共通教育総合教育科目の改善・開発研究、院生・PD向け大学授業実習制度の開発・実施協力、博士・修士人材向けキャリア形成支援の開発・推進など。

AP事業(2016年度~)の推進を支援しています！

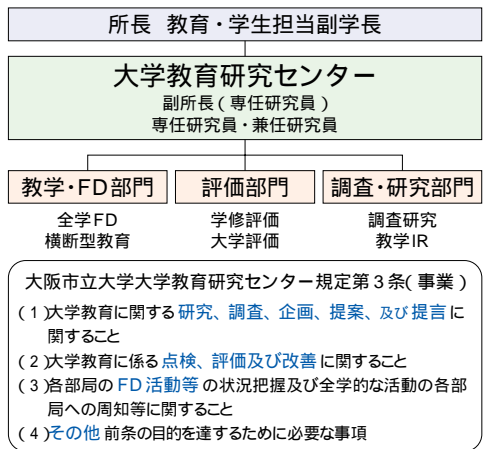
AP事業とは、文部科学省補助金事業「大学教育再生加速プログラム」のことで、高校や社会との円滑な接続のもと、入口から出口まで質保証の伴った大学教育を実現するため、先進的な取組を実施する大学等を支援することを目的とした事業です。大阪市立大学では、テーマⅤ(卒業時における質保証の取組の強化)で「OCU指標とその活用スキームによる学修成果の質保証」の取組が採択されています。OCU指標の開発や学修支援推進室の運営等を初めとして同事業にセンターも協力・支援を行っています。

大学教育研究センター紹介

大阪市立大学 大学教育研究センターは、大学を取り巻く新しい環境の中で、社会の進路を見据えた大学教育のあり方を実現することを目指して研究と開発をすすめるために設立されました。
以下の運営体制(左図)のもと、3本の研究の柱を基本に据えつつ相互に強く関連をもつ各種プロジェクト(右図)に取り組んでいます。

大学教育研究センターの研究

大学教育研究センターの運営体制



高等教育の制度や その役割についての研究

- (1) 学士課程教育システムのあり方
- (2) 学生相談・学習相談システムのあり方
- (3) 社会における大学のあり方
- (4) 生涯学習社会における大学のあり方

全学的FD活動 各種研究プロジェクト

カリキュラム・教育方法の 開発に関する研究

- (1) 学士課程のカリキュラムおよび教育方法の開発
- (2) 初年次教育カリキュラムのあり方
- (3) 授業改善支援システムのあり方

大学教育の 評価および教員評価の あり方に関する研究

- (1) 大学教育評価のあり方
- (2) 大学教員評価のあり方
- (3) FD活動のあり方

大学教育研究センタースタッフの紹介 (平成30(2018)年3月現在)

所長

井上 徹
副学長

専任研究員

大久保 敦
副所長 大学教育研究センター教授
研究分野: 高校大学の接続 / 科学教育 / 古植物学

飯吉 弘子
大学教育研究センター教授
研究分野: 社会における大学のあり方に関する研究 / 教育学 / 大学教育史

西垣 順子
大学教育研究センター准教授
研究分野: 大学教育の評価に関する研究 / 教育心理学

渡邊 席子
大学教育研究センター准教授
研究分野: 教育支援システムの開発 / キャリア教育 / 社会心理学

平 知宏
大学教育研究センター特任講師
COC教務コーディネーター
研究分野: データに基づく教育改善 / 認知科学

兼任研究員

石井 真一
経営学研究科教授

脇村 孝平
経済学研究科教授

鶴田 滋
法学研究科教授

丹羽 哲也
文学研究科教授

福島 祥行
文学研究科教授

高橋 太
理学研究科教授

水野 寿朗
理学研究科講師

山崎 友裕
工学研究科教授

谷口 与史也
工学研究科教授

広常 真治
医学研究科教授

白井 みどり
看護学研究科教授

松木 洋人
生活科学研究科准教授

事務局

清水 浩司
学務企画課長

前阪 弘文
学務企画課係長

大谷 敏恵
学務企画課員



編集 後記

『大学教育だより』(本学の教育広報誌)と『アン ロゾ』(全学共通教育総合教育科目ガイドブック)を合冊発行の形で今年も発行することができました。新入生の方を初めに学生の皆さん、先生方、学外の方々も、是非ゆっくり目を通して、本学における学びの様子を知り、自らの学びを振り返っていただければと思います。
『大学教育だより』「VOICE」欄では、今年は、普段は互いあまり交流のない、文学部と生活科学部

でそれぞれ心理学を学ぶ学生・院生の皆さんが、互いのゼミの様子を見学し合ったうえで座談会を行い、互いの心理学における研究や学修の共通点や相違点などへの理解を深め、自らの学びやキャリア・進路のあり方を考える良い機会となりました。各部署の教育の取組紹介欄では、都市健康スポーツ研究センター、英語教育開発センター、商学部・経営学研究科の3部署が多様な教育・FDの取組の紹介を、市大ニュース欄では、副専攻制度の説明および2017年度から開設されたOCUラーニングセンター(学修支

援推進室)の紹介を行っています。総合大学での学びの意義や、本学の教育や学修支援の多様な取り組みについて、知る機会にいただければ幸いです。
『アン ロゾ』は、法学研究科教授で大学史料室長であるとともに本学OBでもある安竹先生と、大学教育研究センターの副所長で教授の大久保先生が、ご自分の経験も踏まえて、皆さんに、先輩としてのアドバイスや大学での学びとは何かについて語って下さっています。学生の皆さんの大学での学びの道しるべになれば幸いです。
(飯吉)